

【台湾】 銀幕に多様な社会を 描きだす

加藤浩志

一九四五年、日本の敗戦で台湾は五〇年に及ぶ植民地統治から解放され、中華民國・国民党政府に接収された。住民の反政府蜂起である二二八事件（一九四七年）を武力で鎮圧した政府は、台湾全土に戒厳令を敷き、一党独裁による恐怖政治を行った。白色テロのために多くの台湾人が弾圧・粛清された。しかし、一九八〇年代になると、国民党の支配力が低下、民主化を求める動きが活発化した。一九八七年には三八年間続いた戒厳令が解除され、大陸への肉親訪問も許可された。翌年、蔣経国総統が死去、台湾生ま

れの李登輝が総統に就任すると、台湾の民主化・本土化は急速に進んでいくことになった。

一九八〇年代、台湾映画も転換期を迎えた。当時二〇代から三〇代の監督たちが、芸術性・作家性の高い作品を生み出しはじめたのだ。郷土文学の影響も色濃く受けた彼らは、官営映画会社のもとの創作への干渉や商業主義・娯楽主義を嫌い、時代の変化を敏感に感じ取りながら、新しい台湾映画のあり方を模索した。この新しい潮流は「台湾ニューシネマ」（台湾新電影）と呼ばれている。

多言語映画の復興

台湾ニューシネマの代表的監督、侯孝賢に『童年往事』の流れ』（一九八五）という作品がある（写真）。侯監督の自伝的作品で、広東省梅県から一家を挙げて台湾に移り住んだ少年が、荒んだ青春を送りながら、いくたびかの肉親の死に触れて、しだいに成長していく。主人公は、家族と話す時には客家語を、不良仲間とは台湾語（閩南語）を、学校や公共の場所では北京語（国語）を使う。その多様なことばの使い分けは、台湾の言語状況をリアルに描いていた。

一九四五年以前から台湾に住んでいた住民を本省人、それ以降に大陸から台湾に移ってきたものを外省人という。本省人の大多数は閩南語を話す福建系（ホーロー系、全人



写真『童年往事 時の流れ』(DVDパッケージより)

口の七割以上にあたる)であり、さらに客家系、それぞれの部族語を話す台湾先住民(台湾は「原住民」と呼ぶ)がいる。日本時代には日本語が共通語となっていたが(その影響は現在も残っている)、中華民国は北京語を「国語」と制定、北京語教育を推進した。しかし、外省人の多くは大陸の各地から渡ってきたために、実際にはそれぞれの方言を話すことも多かった。このように、本来台湾は多言語社会であった。

台湾の映画は、一九五〇〜六〇年代には台湾語映画も多く作られていたが、国語(北京語)推進運動の展開と、資金面や検閲などでの北京語映画優遇などにより競争力を失い、一九七〇年代には姿を消す。一九六二年には台湾のア

カデミー賞とも言われるゴールデン・ホース・アワード(金馬獎^{*})が設立されたが、一九八九年まで北京語映画のみがノミネート対象であった。また、北京語映画は、国营映画会社である中央映画社(中央電影公司、国民党系)、台湾映画製作所(台湾電影製片廠、新聞局系)、中国映画製作所(中国電影製片廠、国防部系)が中心で、民営の弱小映画会社中心の台湾語映画は太刀打ちできなかった。こうして、台湾映画は北京語映画に占められることになった。

これに対し、侯孝賢ら当時の若手映画人は、農民であろうと子供たちであろうと、映画のなかでみな一様にきれいな北京語を話すのは不自然だと考えた。一九八三年、郷土文学作家・黄春明の短編を原作とするオムニバス映画『坊やの人形』は、中央映画社(中央電影公司)の作品であったが、各話の監督にかなりの自由が与えられた。侯孝賢は貧しいサンドイッチマンを描く表題作で演技経験のない新人を用い、全編の台詞を台湾語で通した。萬仁が監督した第三話「りんごの味」は、米軍の車に轢かれた貧しい男が、そのために多額の慰謝料と保険金を手にすることになるという悲喜劇だが、ここでも英語と北京語と台湾語が効果的に使い分けられた。小学生の娘が北京語と台湾語を通訳する皮肉なシーンもある。

このように、台湾ニューシネマの監督たちは、それまで「方言」として退けられていた母語を、ためらいなく生き

生きと使い始めた。

台湾の歴史を語る

侯孝賢監督『悲情城市』（一九八九）は、タブーであった二二八事件や白色テロを初めて描いた台湾映画である。

舞台は港町・基隆の顔役・林家。戦後の混乱期、長男は家業を継ぎ、日本兵として出征した次男は南洋で消息不明、三男は大陸ヤクザと密貿易に手を染め、検挙され拷問を受ける。長男は大陸ヤクザと地元ヤクザの争いに巻き込まれ死亡。聴覚障害者の四男は写真館を営むが、友人が関わった二二八事件に連座して逮捕される。

二二八事件自体の描き方は間接的であったが、投獄された人びとが次々呼び出され処刑されるシーン、山中にコンミュンを作った友人が摘発され、その場で銃殺されるシーンなど、国民党の白色テロを告発する衝撃的な内容であった。

使用言語は実に多彩で、台湾人は台湾語と日本語、大陸出身者は北京語のほかに広東語、上海語を用いる。会話には通訳を介して行われる。蜂起した台湾人がことばで外省人を見分け暴行する場面があるが、本作では言語が多く対立の象徴として描かれる。そんななか、ひとり四男だけは筆談を行う。それは、台湾人がことばを奪われた——母語を奪われ、また自由な発言も禁じられた——象徴のよ

うにも見えるし、書きことばは言語の違いを越えて理解しあえる可能性を持つことを示しているようにも見える。

李登輝の総統就任以降、客家語、部族語を含む母語の復権が進んだ。教育の場でも、母語教育を復活させ、中華民国のそれではなく台湾の歴史や地理を学ぼうという動きが活発になった。そうしたなかで、二二八事件や白色テロ時代、さらに日本統治時代の歴史の掘り起こしが盛んに行われるようになる。

台湾映画でも、一九九〇年代には、台湾近現代史を描く作品が多くなった。

『悲情城市』でも日本人への同情や日本時代への郷愁が描かれたが、その脚本を担当した呉念真は、自伝的作品『多桑 父さん』（一九九四）を初監督する。昭和一行生まれの父は、終戦後も自らを日本人と言い、時代に取り残されていく。金鉱労働のため肺を患い、内地（日本）旅行を夢見ながら死んでいく姿を哀愁をこめて描く。ちょうど日本では司馬遼太郎の『台湾紀行』が刊行された時期でもあり、台湾の日本語世代が注目され、また、日本の植民地統治を肯定する言論がしきりに聞かれるようになった。

外省人の悲哀

一九四五年から四九年にかけて、百万人規模の外省人が台湾に渡った。その中には高級官僚や高級軍人、富裕層も

いたが、多くは身ひとつで逃れてきた貧しい兵士や一般民衆であった。大陸反攻を信じ、家族を残して台湾に渡り、そのまま離ればなれになる者も多かった。台湾映画は、彼らの悲劇も描き出した。

李祐寧監督の『老兵の春』（一九八四）では、退役した老兵士が孤独に耐えかね、積み立ててきた給金をはたいて原住民の娘を妻にする。ことばと年齢のギャップに悩む老兵は、妻の浮気を疑いやきもきする。

王童監督『バナナ・パラダイス』（一九八九）は、大陸から渡ってきた男の数奇な運命を描く。軍の雑役夫だった男は、台湾は天国だと聞き、兄貴分とともに兵士の名を騙り台湾に渡る。しかし、その名はスパイのもので、兄貴分は捕らえられ、男は逃亡。途中、子連れの女を助け、その夫（大学出）の紹介状を手に入れて職を得る。過酷な拷問で正気を失った兄貴分の世話をしながら、男は助けた女と夫婦を演じつつ、紆余曲折の末に出世していく。戒厳令解除後、大陸へ渡った息子が健在だった両親（男がなりすましている人物の親）を探し出し、電話をかけてくる。男は他人である両親と話しながら自らの不孝を詫び、本当の涙を流す。借り物の名と身分で生きるしかなかった悲劇を、ユーモアをまじえながら描く傑作である。

最近では徐小明監督の『五月の恋』（二〇〇四）がある。これはロックバンド五月天の曲を背景にした、大陸の少女

と台湾青年のネットを通じた恋物語なのだが、実は少女の祖父も、内戦中に台湾に渡った老兵だった。彼は、解禁後大陸に戻るが、故郷のあまりの変貌に喪失感を抱き、台湾で生涯を閉じる。国民党遷台後五五年を経て、いよいよなくなろうとしている外省人第一世代へのレクイエムとなっている。

原住民映画の挑戦

台湾映画に登場する原住民というと、素朴で善良で勇敢というイメージで描かれていた。また近年では、虞勘平監督『二人のペンキ屋』（一九八九）や萬仁監督『超級公民』（一九九八）のように、神秘性を備え、漢族の理解を超えた存在として描かれることも多かった。

二〇一一年、これまでの原住民映画のイメージを覆す大作が完成、空前の大ヒットを記録した。それが魏徳聖監督の『セデック・バレ』である。一九三〇年に起きた霧社事件をテーマとし、徹底的な取材を行い、実在する登場人物と史実にもとづくエピソードを盛り込んでいる。原住民役にはすべて原住民出身の俳優（ほとんどが素人で、軍や消防などの協力で集められた）を起用、台詞はすべて部族語を使用。すでに部族語を話せる人は少なく、言語指導が付いて徹底的に練習させた。同様に日本人役もすべて日本人俳優が演じた。全編を通して北京語も台湾語もほとんど使

われない、異色の台湾映画となっている。しかし、ハリウッドを意識した魏監督は、本作を歴史の再現映画にはせず、『レッドクリフ』の呉宇森をプロデュースに招き、虚構を取り混ぜて娯楽アクション大作に仕上げた。それに対し、言語指導を行ったセデック族の末裔、郭明正（ダキス・パワン）は、本作における史実の誤りや疑問を指摘し、原住民文化が「消費」されることに注意をうながしている。

『セデック・バレ』と同時期に公開された『同じではない月』（二〇一一）は、はじめての原住民監督による劇映画だった。「サヨンの鐘^{きね}」ドラマ取材のためにタイヤル族の町を訪れたディレクターが、年老いた狩人や若者とともに山中のサヨンの村を目指す。途上、狩人は山の掟やサバイバル法を若者に伝えながら艱難辛苦の末に村にたどり着くが、そこはすでに廃墟となっていた。失われていく原住民文化や習俗、言語や信仰に対する哀惜と、今を生きる原住民への共感を、原住民の視点から描いた佳作である。『セデック・バレ』の大ヒットが、こうした新たな原住民映画製作への契機となることを期待したい。

台湾映画の再生と課題

一九八〇年代後半から一九九〇年代にかけて、台湾ニューシネマの監督、侯孝賢や楊徳昌らによって台湾映画

は国際的に認められた。しかし、それは台湾映画衰退のはじまりの時期でもあった。映画館の数は二〇世紀末には一九八〇年代の半数以下に減少し、二〇〇一年に台湾で公開された国産映画はわずかに一〇本にまで落ち込んだ。国際映画祭で好評を博しながら、台湾映画は瀕死の状態だったのである。それが突然好転したのが二〇〇八年である。新人・魏徳聖監督の『海角七号 君想う、国境の南』が、歴代台湾映画興業収入第一位、外国映画をあわせても『タイタニック』につぐ歴代第二位の記録を打ち出し、社会現象となった。二〇一一年にはベストセラー作家・九把刀の初長編監督作品『あの頃、君を追いかけた』が香港で中国語映画歴代一位の記録を打ち出した。こうして、新世代監督の活躍により台湾映画は活気を取り戻しつつある。

しかし、資金面では国産映画製作補助金（国片製作補助金^{すけ}）などの公的補助金に頼っている部分が多い。大ヒットした『セデック・バレ』も、異例の巨額融資が行われ、国家プロジェクトとしてようやく完成できたのである。台湾映画が独り立ちし、国際的競争力を獲得できるかが今後の課題であろう。

●注

*1 「金馬」とは共産党軍との激戦が行われた金門島・馬祖島の名に由来。

*2 中国大陸に反撃し、中華民国の国土を取り返すこと。共産党との内戦に敗れ、台湾に撤退した国民党政府のスローガン。

*3 一九三八年、出征する日本人教師の荷物運びを志願したタイヤル族の少女サヨンが遭難、台湾総督は愛国美談として記念の鐘を贈った。内地では「サヨンの鐘」の歌が作られヒット、一九四三年には李香蘭（山口淑子）主演で映画化された。

*4 「輔導」には補助だけでなく正しい方向に導くニュアンスがある。

●参考文献

【日本語】

暉峻創三総合監修（二〇一〇）『中華電影データブック 完全保存版』キネマ旬報社。

中川仁（二〇〇九）『戦後台湾の言語政策——北京語同化政策と多言語主義』東方書店。

彭瑞金（二〇〇五）中島利郎・澤井律之訳『台湾新文学運動四〇年』東方書店。

森宗厚子編（一九九七）『台湾映画祭 資料集・台湾映画の昨日・今日・明日』財団法人現代演劇協会。

田村志津枝（一九九二）『悲情城市の人のびと——台湾と日本のうた』晶文社。

【中国語】

聞天祥（二〇一二）『過影 一九九二—二〇一一台湾電影総論』台北：書林出版有限公司。

徐樂眉（二〇一二）『百年台湾電影史』新北市：揚智文化事業股份有限公司。

郭明正（二〇一一）『真相・芭萊《賽德克・芭萊》の歴史真相 輿随拍札記』台北：遠流出版事業股份有限公司。

藍祖蔚（二〇一〇）『王童七日談——導演與影評人的對話手記』台北：典藏藝術家庭股份有限公司。

張靚蓓（二〇〇九）『声色盒子』台北：大塊文化出版股份有限公司。

中国電影図史編輯委員会（二〇〇七）『中国電影図史（一九〇五—二〇〇五）』北京：中国伝媒大学出版社。

宋子文（二〇〇六）『台湾電影三十年』上海：復旦大学出版社。

黄建業総編輯（二〇〇五）『跨世紀台湾電影実録（一八九八—二〇〇〇）』台北：行政院文化建設委員会、財団法人国家電影資料館。

焦雄屏編（二〇〇二）『台湾新電影九〇新新浪潮』台北：麦田出版。

盧非易（一九九八）『台湾電影：政治、経済、美学（一九四九—一九九四）』台北：遠流遠流出版事業股份有限公司。

李天鐸（一九九七）『台湾電影、社会與歴史』台北：亞太圖書出版社。

劉現成（一九九七）『台湾電影、社会與国家』台北：揚智文化事業股份有限公司。

陳儒修（一九九四）羅頰誠訳『台湾新電影研究——台湾新電影』

的歴史文化経験」台北・萬象圖書股份有限公司。

映画リスト

*北京語は「国語」、閩南語は「台湾語」とした。

『あの頃、君を追いかけた』……①那些年、我們一起追追的女孩

『あの頃、ほくらがみな追いかけた女の子』／You Are the Apple of My Eye、②ギテンス・コー(チウパートナー、九把刀)、③二〇一一年、④台湾、⑤国語、台湾語、⑥東京国際映画祭(二〇一一年)。

『阿孝(アハ)の世界』……(↓)『童年往事 時の流れ』を参照)

『同じではない月』……①不一樣的月光／Finding Sayun、②ラハ・メボ(陳潔瑤)、③二〇一一年、④台湾、⑤国語、タ

イヤル語、⑥未公開。

『海角七号 君想う、国境の南』……①海角七号／Cape No. 7、

②ウエイ・トーション(魏徳聖)、③二〇〇八年、④台湾、

⑤国語、台湾語、日本語、⑥アジア海洋映画祭イン幕張(二〇〇八年)、劇場公開(二〇〇九年)、DVD販売。

『五月の恋』……①五月之恋／Love of May、②シユイ・シアオ

ミン(徐小明)、③二〇〇四年、④台湾、中国、⑤国語、⑥劇場公開(二〇〇六年)、DVD販売。

『セテック・バレ 太陽旗』……①賽徳克・巴萊 太陽旗／

Seedig Bale、②ウエイ・トーション(魏徳聖)、③二〇一一年、④台湾、⑤セテック語、日本語、国語、⑥第七回大阪ア

ジアン映画祭(二〇一二年)、劇場公開(二〇一三年予定)。

『セテック・バレ 虹の橋』……①賽徳克・巴萊 彩虹橋／Seedig Bale、②ウエイ・トーション(魏徳聖)、③二〇一一年、④台湾、⑤セテック語、日本語、国語、⑥第七回大阪ア

ジアン映画祭(二〇一二年)、劇場公開(二〇一三年予定)。

『タイタニック』……①Titanic、②ジェームズ・キャメロン、

③一九九七年、④アメリカ、⑤英語、⑥東京国際映画祭(一九九七年)、劇場公開(一九九七年)、DVD販売。

『多桑 父さん』……①多桑／A Borrowed Lie、②ワー・ニエ

ンチェン(呉念真)、③一九九四年、④台湾、⑤国語、台湾語、日本語、⑥東京国際映画祭京都大会(一九九四年)、劇場

公開(一九九五)、ビデオ販売。

『超級公民』……①超級公民／Connection by Fate、②ワン・レン(萬仁)、③一九九八年、④台湾、⑤国語、台湾語、⑥東京国際映画祭(一九九八年)。

『童年往事 時の流れ』……①童年往事／The Time to Live the Time to Die、②ホウ・シアオシエン(侯孝賢)、③一九八五年、④台湾、⑤国語、台湾語、客家語、⑥ぴあフィルムフェ

スティバル(一九八七年、『阿孝(アハ)の世界』のタイトルで)、劇場公開(一九八八年)、DVD販売。

『バナナ・パラダイス』……①香蕉天堂／Banana Paradise、②ワン・トン(王童)、③一九八九年、④台湾、⑤国語、台湾語、⑥アジアフォーカス・福岡国際映画祭(一九九一年)。

『悲情城市』……①悲情城市／A City of Sadness、②ホウ・シアオシエン(侯孝賢)、③一九八九年、④台湾、⑤国語、台湾語、日本語、広東語、上海語、⑥劇場公開(一九九〇)、DVD販売。

『二人のペンキ屋』……①兩個油漆匠／Two Painters、②ユイ・カンピン(虞勘平)、③一九八九年、④台湾、⑤国語、⑥ア

シア映画の新しい波九〇（一九九〇）。

『坊やの人形』……①児子的大玩偶（息子の大きな人形）／『The Sandwich Man』②ホウ・シアオシエン（侯孝賢）、ツォン・チュアンシアン（曾壮祥）、ワン・レン（萬仁）、③一九八三年、④台湾、⑤国語、台湾語、⑥劇場公開（一九八四）、DVD販売。

『レッドクリフ Part I』……①Red Cliff Part I／赤壁、②ジョン・ウー（呉宇森）、③二〇〇八年、④中国、アメリカ、香港、台湾、韓国、日本、⑤中国語、⑥劇場公開（二〇〇八）、DVD販売。

『レッドクリフ Part II —— 未来への最終決戦 ——』……①Red Cliff Part II／赤壁 2…決戦天下、②ジョン・ウー（呉宇森）、③二〇〇九年、④中国、アメリカ、香港、台湾、韓国、日本、⑤中国語、⑥劇場公開（二〇〇九）、DVD販売。

『老兵の春』……①老莫の第二個春天（莫さんの第二の春）／Second Spring of Mr. Mur' ②リー・エウニン（李祐寧）、③一九八四年、④台湾、⑤国語、台湾語、⑥中華民國台湾映画祭（一九八五）。

著者紹介

①氏名……加藤浩志（かとう・ひろし）。

②所属・職名……フリーランス。

③生年・出身地……一九六一年、東京都。

④専門分野・地域……中国語圏映画、中国・台湾・香港。

⑤学歴……東京外国語大学外国語学部中国語学科、同大学院地域文化研究科文化文学コース博士前期課程。

⑥職歴……東方書店出版部（一九八六～二〇〇六年）。

⑦現地滞在経験……特になし（一九八八年業務にて二か月北京滞在）。

⑧研究方法……一九八三年夏、北京で解放前の上海映画を重点的に観る機会に恵まれた。以後、中国、香港、台湾等で映画を観ることも多い。映画祭もよいが、街中の劇場で公開中の新作を観ると、観客の反応に驚かされたりする（八〇年代香港の皇后戲院で娯楽映画を観たときの、観客の興奮の渦は忘れられない）。日本では、福岡アジア映画祭や山形国際ドキュメンタリー映画祭でめったに観られないアジア映画に出逢うことができる。各国の映画人との交流も楽しみのひとつである。

⑩研究上の画期……一九九〇年代後半のVCDの普及（のちにDVD）。それまでの映画研究はとにかく作品を観る機会を逃さないことが重点だったが、中国や台湾の古い映画が次々にVCD化され、安価で購入できるようになり、くり返し観ることが可能になった。いまや、禁断の映画『武訓伝』すら簡単に観ることができる時代。昔観た作品を再度、三度見返すと、初見では気づかなかったことを発見することもたびたび。

⑪推薦図書……『中華電影データブック完全保存版』（キネマ旬報社、二〇一〇）。中国語圏映画を研究する上で、もつとも頼りにできる一冊。ただ、紙幅の関係からか今回の版で割愛された作品や人物もあり、できれば以前に出たものも揃えておくと便利。

⑫推薦する映画作品……『恋恋風塵』（侯孝賢監督、一九八七年、台湾）。侯孝賢監督の最高傑作。